

ばなし雲雀のお祝ひ

美 知 代

雲雀夫婦は市場近くの、とある園の中に住つて居りました。而して地の上にある暖かい奇麗な巢の中に可愛い四羽の子雲雀を持つて居ました。夫婦の親雲雀は朝から晩迄終日飛び廻つて、小雲雀共の爲めに、麥だの米だの方々から拾つて來ては食べさせて居ました。

或る朝の事、旦那様の雲雀は奥様の雲雀を巢の中に残して、留守の間に小供達に氣をつけるやうに云ひ置いて、自分一人空高く飛んで行きました。雲雀夫人は、其の後で小供達が餘り泣くもんですから、若しかして巢の近くで、穀物か何か發見するかと思つて、ほんの近處迄探しに行きました。處が運悪くも、捕機にかゝつて、どうもがいても脚をさらはれたまま逃げ出す事が出来ません、困つて居ますと、其處

へ惡戯さうな小供が遣つて來て、羽ばたきの音を聞きつけ、捕機から外して、兩手で確乎捕へました。

「家へ持つてつて籠へ入れて飼つてやらう。」

旦那様の雲雀は此時巢へ歸り掛つて、自分の奥様が惡戯つ兒に連れられて行くのを見ましたので、何處へ行くかと、其の跡をつけました。小供は家へつれて行きました。旦那様の雲雀は、最うこれつきり細君とは生き別れだと思つて、悲しくて悲しくて堪りません、併し其の内に小供が、奥様の雲雀を籠の中にに入れて、窓の處へ吊すのを見ましたので、直ぐに歌を歌つて、可哀想な細君を慰めました。而して毎朝窓の傍へ來ては、赤ん坊の雲雀達はよく氣をつけて世話して居るから安心するやうに、食物も澤山だと云つて聞かせました。幸窓がすつくり開け放してありますので、部屋の中に居る細君にも、旦那様の雲雀の言葉はよく聞えるのでありました。

或る日、大きな白猫は庭を歩いて居ましたが、部屋の中の鳥籠を見付けて、雲雀夫人を殺して食つて

やらうと決心しました。部屋の中には誰も居ません。猫は窓からのつそり入つて来て鳥籠に飛び掛り、今にも前脚でつかみ掛らうとしました。と籠は引くりかへつて、其はぐみに籠の戸が開きました、而して猫が飛び掛かる其の一時早く、雲雀夫人は窓の外へ飛び出しました。

家へ歸つて行く途中で、雲雀夫人は旦那様に逢ひました。旦那様は奥様の雲雀が酷くやつ

れて居るのを見まして、途中で暫く休ませて、一緒に巢へ歸つて行くのでしたが最う二度と再び一緒に暮す事は出来まいと思つて居た細君が、斯うして無事で歸つたので、嬉れしさに大聲を擧げて「生懸命喜びの歌を歌ひました、森中の鳥は何



事が起つたかと驚ろいて、皆な出掛けて来て雲雀夫婦を取り巻きました、而して雲雀夫人に、何うして籠から逃げ出す事が出来たか、聞かせて下さいと頼みました。  
「何卒か皆様、明日の午後にお越しを願ひます、妻が無事で歸つた喜びに、何も御座いませんが茶話會でも開き度いと存じますから、其時ゆつくりとお話を致させませう。」

「では明日、左様なら」と云ひ合つて別れました。雲雀夫婦は家に歸つて来ました、小供達は母様に會つて大喜びです。

「私本當に嬉れしう御座いますわ、よくまあ友達をお招ぎして下さいました。斯う雲雀夫人が申しました、と、  
「何か茶話會のお馳走を見付けて来ませう。」  
と旦那様の雲雀は申しませう。

「左様？ 納戸に何か御座いませんかしら。」  
「麥だの米だの、而してパン屑が随分澤山あるだらう。」  
「ですけ共種々御馳走がいりますわねえ、駒鳥さんは蟲がお好きだし、つぐみさんの御夫婦は、蛸と蝸牛を大好きで被入いますのねえ。」

「左様、それに若手の婦人連は菓物を喜ぶだらう。」  
「左様よ、ねえ貴郎、何處かに櫻實はないでせうか櫻實があると卓子がすつかり奇麗に見えるんですが

「探して見よう、屹度何處かにあると思ふ、今朝俺が市場を通つて居たら、雀君の處に奇麗にうんだ櫻實だの、まだ種々な善いものがあつたつけ。」

旦那様の雲雀は出掛けて行つて間もなく、甘さうな菓物をどつさり持つて歸つて来ましたが、翌る朝は又お友達のつぐみ君と一緒に蝸牛狩りに出掛けて直ぐ持つて往つた瓶を一杯にして戻つて来ました。それから午後は集會の準備に取り掛りました。つぐみ君が火を作ると、雲雀氏は水を汲んで参ります。雲雀夫人は一番立派な卓子掛けを出して来て卓子に被せるやら、お茶道具を並べるやら、僅かな時間にすつくり準備が整ひました、出来上つた御馳走は奇麗にお皿に盛られて、開會の時間まで、埃の掛らぬやう眞白い布で被うてありました。

今度は餘興の準備です。旦那様の雲雀は奇麗な平たい板を何處かで發見して来て、それを、地の上にあつた丸太の上ののつつけました。とそれで立派なシ

ソーが出来ました、恰度其處へ駒鳥氏が、山雀氏と一緒に遣つて來ましたので、第一に其のソーの遊戯をしました。然うして居る内に段々皆集つて來まして、皆な此の遊戯を面白がつて致しました。ですけれ共ソーは一つよりありませんから、皆なは順番の廻つて來るのを待たなければなりません。貴婦人の多くは雲雀夫人を取り巻いてお話を初めしました。雲雀夫人は何うして捕機に引かゝつたか、何うして猫が噛み掛つたか、然うした話を致しました。「でもまあ好う御座いましたねえ、窓が閉つてなくて、若し貴女閉つて、御覽なさいまし、それこそ飛び出す事も何も出来なさないで、何座にお困りなさいましたか知れやしませんわ。」と雀嬢が申しますので、

「本當に助かりましたの、私最うくこれにこりて二度と再び捕機の傍になんぞ參る事ぢや御座いませんわ。」と雲雀夫人は答へました。『皆何れを遊ばしてらつしやるんでせうねえ、見

白の賑やかな會です。

山雀氏が起つて、

『今度雲雀夫人

が無事にお歸りになつた事を、私共一同は心の底から喜んで居る次第ですが何卒一日も早く夫人が元々通りの健全なる體に復されん事を希望致します。』と申しますと、雲雀氏はそれに答へて、

『私共夫婦は御一同が斯うして、自分等と一緒に面白く遊んで下さつた事を、有難く感謝致します。』と申しました。

て參らうぢや御座いませんか。』とつぐみ嬢は云ひ出ししました。

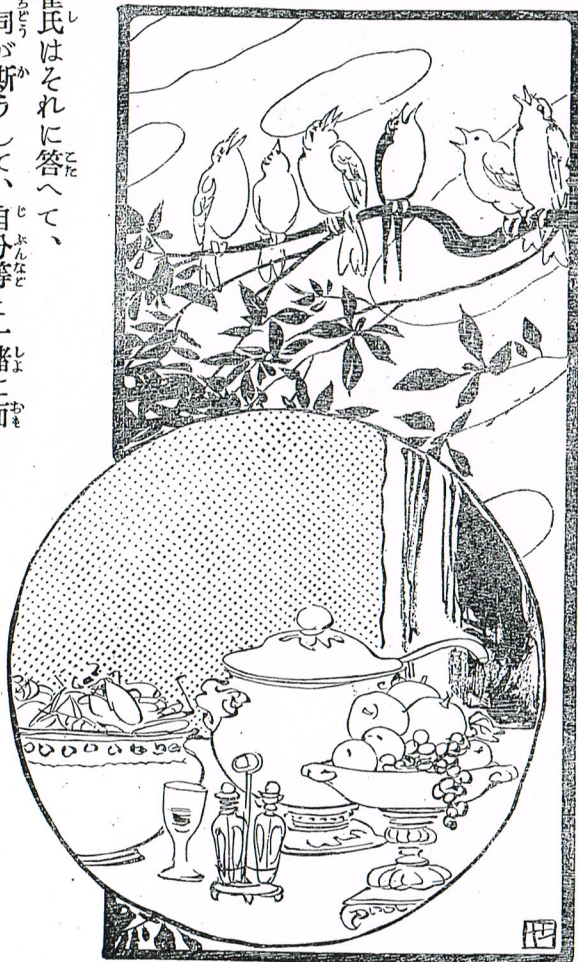
『多分競争をなすつてゐるんでせう、アラ御覽なさいまし。』

雲雀夫人の指す方を見ますと、馳けつくらが初まつて居て、燕嬢は一等賞を買ひました。而して燕嬢の弟が二等賞です。此二人は鳥仲間誰よりも一番早く馳けました。

此時雲雀夫人はお茶が煮立つたから來るやうに一同をよびました。誰も彼も好い加減遊戯をしましたので、お腹が空いて御馳走を頂くには恰度よくなりました。

山雀氏は雲雀夫人の直ぐ傍に坐つてお茶を入れるお手傳ひをしました。つぐみ氏が蝸牛の皿を一同に配りますと、駒鳥氏は菓物を貴婦人連に渡しました。一同は盛んに食べました。お皿が空つぽになると雲雀夫人は直ぐ又それを御馳走を盛らすめ、段々お腹がよくになると皆な思ひく話し出したる事に致しませう。

と山雀氏の發議の下に、一同はズリ長い杖の上



に並んで、嚴かに喜びの歌を歌ひました。其の歌の聲は愛と樂と、此の二つの囁きを包んで響き渡るのであります。鳥達は雲雀夫婦に今日の饗應を謝して、それくの巢へと歸つて行きました。(完)